

“文末名詞” について

新屋 映子

キーワード：文末名詞・文末名詞文・述語名詞・連体修飾・述定

要 旨

本稿では、「彼ハ出カケル様子ダ」の「様子」のように、連体部を必須とし、コピュラを伴って文末に位置し、主語と同値関係でも包含関係でもない名詞を「文末名詞」と名付け、それらを述語とする文は主語と述語の意味的關係からみて大きく七つに分けられること、それらは主語で表わされたものをモノとして述定するものではないために連体部の内部に補語としておさまり得ないものであること、文末名詞になり得る形は状況語や、属性を表わす規定語になるものであること、コピュラが下接する形と形式的な動詞に続く形との関係、述語名詞としての性格、などについて考察した。形式名詞の「ノ」「ハズ」などがコピュラを伴って助動詞的にはたらくことはよく知られているが、文末名詞はこれらよりはより実質的な意味を持ちながら、同じく文末に位置して述定の意味にかかわっており、助動詞的な性格をもつ名詞と言えよう。

1. 「文末名詞」

文の分類のしかたの一つに、述部の品詞によって「動詞文」「形容詞文」「名詞文」のように分ける方法がある。名詞文というのは名詞にコピュラが下接した形の述語をもつ文で、その典型は、

(1) 彼女ハ吉田花子サンダ

(2) コレハ昨日買ッた本ダ

のように述部が主部で表わされたものと同一の関係にあるものを示す文や、

(3) 彼ハ学生ダ

(4) 「坊ちゃん」ハヨイ作品ダ

のように述部が主語で表わされたものを質規定的に類別している文であり、主語名詞の指し示すものは述語名詞の指し示すものと同値またはその下位概念である。名詞とは事物をモノとして表わす語である。従って述語名詞は主語名詞の指し示すモノをモノとして述定する。モノのモノとしての述定とは同値または包含関係としての述べてにほかならない。名詞文の典型はこのような主述関係にあるが、名詞文の中には次のようなものもある。

(5) これは完全な不意打ち^{注1}だった。(裸211)

(6) 平岡は不在であった。(そ110)

(5)の述語名詞「不意打ち」は主語「これ」の指し示すものの性格を、(6)の述語名詞「不在」は主語「平岡」の状態を表わしている。これらの主語と述語がそれぞれ指し示すも

(2) “文末名詞”について

のは互いに同値関係でも包含関係でもなく、述語名詞は意味的には形容詞の範疇に属していると言える。いずれも(1)～(4)のように述語名詞が主語をモノとして述定する名詞文ではないのである。

ところで、このように述語名詞が主語をモノとして述定するのではない名詞文の中には、次のようなものもある。

(7) 川田君はすなおで朗らかな性格です。(コキ 391)

(8) 梓川は、この前の春の時とは少し異なった感じだった。(氷 468)

(9) 平岡はあまりこの返事の冷淡なのに驚いた様子であった。(そ 115)

(7)～(9)の下線を施した述部はそれぞれ「川田君」の性格、「梓川」の感じ、「平岡」の様子を表わしており、述語名詞「性格」「感じ」「様子」はそうした述定の意味を明示する働きをしている。すなわち(7)～(9)の述部は、述定の意味的なわくぐみを表わす上位概念が、述定の実質的な内容を表わす語句に連体修飾された形になっている。これらは連体部を取り去ると次のように非論理的な文になってしまう。

(7)→*川田君ハ性格デス (*は不自然な表現であることを示す)

(8)→*梓川ハ感じダッタ

(9)→*平岡ハ様子デアッタ

ただし連体部を取り除くと文意をなさなくなるのは、こうした述部に限ったことではない。(2)や(4)の述部も連体部をとると、

(2)→コレハ本ダ

(4)→「坊ちゃん」ハ作品ダ

のようになり文意が変わってしまう。しかしこれらは文脈を考えに入れなければ、それ自体は論理的に成立する文であり、(7)～(9)とは異質である。本稿は(7)～(9)のような構造を持つ文、及びこうした述語に用いられる名詞というのはどのようなものなのかを考えてみようとするものである。なお(7)～(9)の「性格」「感じ」「様子」のように、連体部を必須とし、コピュラを伴って文末に位置し、主語と同値または包含関係にない名詞を便宜上「文末名詞」、文末名詞を持つ文を「文末名詞文」と名付けることにする。

文末名詞になる名詞はふつう単独では述語にならず、常に連体部と共に合成述語を形成する。しかしたとえば(7)～(9)の文末名詞「性格」「感じ」「様子」が、

(10) 彼は性格が悪イ

(11) 感じガツカメナイ

(12) 様子ヲ見テコヨウ

と文中で単独で用いられるように、それらは述語以外の所では必ずしも修飾語句を必要としない。文末名詞というのはあくまで用法上の命名である。

一般にそれ自身の意味が希薄で実質的な意味を修飾語句に依存する名詞を「形式名詞」とよぶ。ただ「形式名詞」という語はそれほど厳密に用いられているわけではなく、「辺」「方」のように修飾語句を必須とするものもあれば、ふつう形式名詞とされる「モノ」「コト」「人」などが単独で用いられるということもある。また単独で用いられ得る「人」より

も修飾語句を必須とする「者」や「かた」の方がかえって内包が豊かだということもある。「形式名詞」を名詞の一用法ととらえるならば、文末名詞も形式名詞の一種とってよいであろう。

2. 文末名詞文の意味的分類

文末名詞文は主語と述語の意味的關係によって次のように分類できる。

A. 述部が、主語で表わされたものをパラディグマティックなものの中で位置づけるもの。

(13) 三千代の病気は今云う通り軽い方じゃない。(そ 272)

(14) わたしの学校の絵の先生は、先生というより芸術家のタイプです。(コキ 437)

(15) 彼ノ行動ハ子供ガ後先モ考エズ突ッ走ルタグイダ

文末名詞になり得るものとして「種類」「類」「たぐい」「タイプ」「方」「部類」「クラス」「階層」「系統」「パターン」などがある。

B. 述部が、主語で表わされたものの属性を述べるもの。

(16) 子供の時から、彼は自分をいじめる悪童に、どんな仕打ちをうけても、相手をにくむということのできぬ性格なのである。(おバ 113)

(17) 極秘と聞くと、参吉はまるで餌にとびつく魚のように、どうしても飛びついて行かなくては済まない性質だった。(金 12)

(18) 萩乃は女のくせに大きな乱暴な字を書いたちだった。(金 17)

文末名詞は主語の指し示すものの属性を実現する側面を表わしており、「性質」「性格」「気質」「気性」「性分」「たち」「体質」「人柄」「立場」「構成」「構造」「仕組み」「形式」「様式」「顔立ち」「人相」「体格」「匂い」「形」「趣」「体裁」「運勢」「身分」「出身」などがある。また次のように述語が主語で表わされたものの關係を表わすものも属性文に準じて考えることができよう。

(19) このカバは、入園以来、17年余りもぼくと苦業を共にしてきた仲である。(コキ 583)

(20) 我々ハ持ッ持ッ持ッ持ッ関係ダ

C. 主語で表わされたものや一定の状況の様態を感覚的に把握して述べるもの。

(21) 翌日、車で現地を見に行つた時には、高田建設や深川組の人たちは、水力建設部長の説明を聞く気もなく、テントの中の椅子に坐って冷たい飲みものを飲み、煙草をすっているような有様だった。(金 157)

(22) 神谷直吉は返事に窮した様子だった。(金 313)

(23) 隣ノ部屋ニ誰カ人ガイル気配ダツタ

文末名詞になり得るものとして「感じ」「様子」「模様」「状態」「^よ風」「有様」「形」「風情」「格好」「空気」「気配」「気色」「態度」「素振り」「言い方」「口調」「口振り」「表情」「調子」「具合」「勢い」などがある。

D. 述部が、主語(省略されることが多い)で表わされたものの主観を表わすもので、さら

(4) “文末名詞”について

に以下のように分けられる。

D-1. 述部が、主語で表わされたものの身体的感覚を述べるもの。

(24) まず最初、音が耳に入ったんです。ブレーキの音でしょうか、キイツという音がした時にはもう身体が宙に浮いてる感じでしたね。(恐々213)

(25) 心も体も疲れはてた感じである。(おバ67)^{注2}

D-2. 述部が、主語で表わされた主体の感情・心理を述べるもの。

(26) 僕だってこのままでは兄さんに対してすまない気持です。(氷373)

(27) 魚津にはナイロン・ザイルの実験以来、うっとうしい毎日が続いていたが、いま初めてその憂鬱さから脱け出すことができた思いだった。(氷327)

文末名詞になり得るものとして「感じ」「気持」「思い」「心持」「気分」「心境」などがある。

D-3. 述部が、主語で表わされた主体の意思を述べるもの。

(28) そうして、僕の悪い所はちゃんと詫まる覚悟です。(そ256)

(29) あれ！本当にやる気だよ。(寺125)

文末名詞になり得るものには「意向」「気」「魂胆」「料簡」「覚悟」「考え」「決心」「心組」「方針」「予定」「主義」「計算」「つもり」などがある。

D-4. 述部が、客観的な事象に対する、主語で表わされた主体の認識や意見を述べるもの。

(30) じゃ、僕等二人は世間のおきてに叶う様な夫婦関係は結べないという意見だね。(そ268)

(31) 常盤の方はそういうこともあり得るといった程度の考え方だが、(氷293)

文末名詞になり得るものには「意見」「考え」「印象」「考え方」「認識」「見方」「解釈」「判断」などがある。

E. 状況をより詳しく述べたり、別の角度から解説を加えたりするもの。

(32) 大体、今の日本は道学先生ぶってる人がむやみに多く、人類全体の立場から話をはじめたりする。これの最たるものが、近頃大評判になっている右翼の大物で、口さきだけはやたらに立派なことを言って、手ではきたないことをしていた塩梅だ。(低53)

(33) 「遠藤滝子だよ。まさかひとの女を横取りして、ただという法はなかるうからね」そういう言い方はやくざめいた脅迫の口調だった。常太郎は負けなかった。「そんなものは出せないね。滝子はお前の女房じゃあるまい。ただの女だ。お前は嫌われただけの話だ。お前は横取りなどと言っているが、滝子はお前が嫌だから俺の方へ来たんだ。あいつの自由意志だよ」(金301)

(34) いずれ改めて拝眉、万々御礼申上げ度く存じますが、とり急ぎ使いを以て右御挨拶申上げる次第であります。(金188)

文末名詞になり得るものとして「塩梅」「具合」「次第」「道理」「話」「理屈」「わけ」「顛末」「始末」などがある。

F. 主語で表わされたものや状況の時間的または空間的な位置関係を述べるもの。

(35) 池は開花をはじめたところだった。(裸 210)

(36) その時平岡は、早く家を探して落ち付きたいが、あんまり忙しいんで、どうする事も出来ない、たまに宿のものが教えてくれるかと思うと、まだ人が立ち退かなかったり、あるいは今壁を塗ってる最中だったりする。などと、電車へ乗って分れるまで諸事苦情なくめであった。(そ 50)

(37) 彼ハ自殺スル寸前ダツタ

(38) 郵便局ハアノ角ヲ曲ガツタ所デス

文末名詞になり得るものには「ところ」「近辺」「近く」「そば」「隣」「寸前」「最中」「途中」「頃」「直前」「直後」「後」「時分」などがある。

G. 話し手が他から得た情報として事象を伝達するもの。

(39) 太郎の父は大田絵具の社長で、母は後妻ということだった。(裸 202)

(40) 財部総裁の退職金は大変な金額だったという話だね。(金 309)

(41) 家は所の旧家で、先祖から持ち伝えた山林を年々伐り出すのが、重な用事になっているよしであった。(そ 163)

文末名詞になり得るものには「こと」「話」「噂」「評判」「由」などがある。

3. 文末名詞と連体部との意味的關係

文末名詞は連体部を必須とする被修飾名詞である。連体部と被修飾名詞との意味的關係には大きく、被修飾名詞の表わすものが連体部の表わすできごとの成立要素である場合、すなわち連体部と被修飾名詞とが意味的に同じできごとの内部でかかわっている場合と、両者がことからのレベルを異にする場合とがある。前者は被修飾名詞が連体部の述語の補語として意味的に連体部の内部におさまり得るものであり、後者はそうならないものである。文末名詞用法をもつ名詞は種別・性質・状態・主観・事情・時・所・評判といった抽象的な意味範疇の上位語に限られているが、文末名詞になり得る名詞が連体部を伴って文末に来て、連体部との関係が前者のものであれば文末名詞ではない。なぜならば連体部の表わすできごとの主体や対象であることはモノとしてのあり方だからである。

(42)a. ソレハ皆ニ支持サレテイル考エダ

b. 彼ハ辞職スル考エダ

(43)a. 不思議ナノハソノ時私ガ受ケタ印象ダ

b. 私ハ彼ノ作品ガ一番出来ガイイトイウ印象ダ

a. の下線部の被修飾名詞は、

(42)a. → (ソノ) 考エガ皆ニ支持サレテイル

(43)a. → ソノ時私ガ (アル) 印象ヲ受ケタ

のように連体部の内部におさまり得る。(42)a. の「考エ」は連体部の表わす動きの主体、

(43)a. の「印象」は連体部の表わす動きの客体である。これに対し b. の連体部は被修飾名詞の内容を表わしたもので、「考エ」「印象」は連体部の内部におさまり得ない。(42)a. は

(6) 「文末名詞」について

同定文, (43)a. もいわゆる強調構文で同定文の一種であるのに対し, (42)b. (43)b. はそれぞれ「考エ」「印象」を文末名詞とする文末名詞文である。

具体物を表わす述語名詞が常に主語をモノとして述定するはたらきをもつのは、それらが語彙的にモノを意味するからであり、文末名詞がモノとしての述定以外にも用いられるのは、それらが事物をモノとして表わす「名詞」でありながら語彙的にモノを表わすものではないからである。種類の上位概念を表わす名詞は主語で表わされたものをパラダイグマティックなものの中で位置づける文の文末名詞として、側面の上位概念を表わす名詞は主語で表わされたものの属性を規定する文の文末名詞として、様態の上位概念を表わす名詞は主語で表わされたものの様態を描写する文の文末名詞として…というように、文末名詞の語彙的意味はそのまま文末名詞文における述定の意味となる。高橋太郎 1979 は名詞が動詞句で修飾されている場合の連体動詞句と名詞との意味的な関係を、関係づけのかかわり、属性づけのかかわり、内容づけのかかわり、特殊化のかかわり、具体化のかかわり、二次的なかかわりに分類した。文末名詞の連体部は動詞句だけではないが、文末名詞と連体部との関係もこれに準じて考えることができる。文末名詞にならないのは関係づけのかかわりの場合で、属性づけのかかわり以下はいずれも文末名詞とその連体部の間にみられる関係である。文末名詞の連体部は、

(44) しかし若松は渋い表情だった。 (金 224)

のように文末名詞の表わす概念に属性を付け加えたり、

(45) 彼は平岡に逢って、三千代のために充分話をする決心であった。 (そ 195)

のように内容を提示したり、

(46) ともかく、魚津は酒田行きの金ができたとほっとした気持だった。 (氷 368)

のように下位概念で特殊化したり、

(47) 相手はふと困ったように返事を考えあぐんでいる様子であった。 (氷 20)

のように具体的事象として提出したりすることによって、述定に実質的な意義を与えている。そうして実質的意義を連体部に預けた文末名詞は、述定の意味そのものを担うことにより、それぞれの語彙的意味に従って主観、説明、アスペクト、伝聞などを表わすモーダルな成分に近づいているのである。

4. 文末名詞と文の成分

述語の指し示す出来事の必須要素を表わす文の成分を述語に対する補語という。名詞の本来の任務は主語や目的語などの補語になることである。連体部と文末名詞の結びつきも文末名詞が名詞の一種である以上補語にもなる。次の→の前が補語としての例、→の後が文末名詞としての例である。

(48) その新聞を出しそうな態度が、 少し魚津の目にはかたくなな感じに映った。(氷 146) →彼ハソノ新聞ヲ出シソウモナイ態度ダツタ

(49) 犯人ヲ見タ者ガイルトイウ話ガ マコトシヤカニ伝エラレタ→犯人ヲ見タ者ガイルトイウ話ダ

このように文末名詞になり得る形が主語や目的語などの補語であるということは、前節でみたように連体部との関係においても、また語彙の意味においてもモノではない名詞が文においてモノとして差し出されているということの意味する。しかし実際は文末名詞になり得る形は補語であるよりも文中では補語以外の成分になることが多い。たとえば、文末名詞が主語で表わされたものをパラディグマティックなものの中で位置づけるもの、及び主語で表わされたものの属性を述べるものは、その同じ形が下のように規定語として文中に入る。

(50) そのほか、たとえば、大田夫人が後妻だから先妻の子の太郎にことさら善意をおしつけるのだとか、外出好きな性格だとか、ときには夫妻の寝室に対する嘲笑的な臆測などといった種類の醜聞である。(裸 203)

(51) その借金の穴埋めに、今度は土建業者に政治献金をさせ、その代りに国家事業のような性質の大発電工事をやらせてやろうというのだ。(金 91)

また主語で表わされたものや一定の状況の様態を感覚的に把握して述べる、連体部と文末名詞の形は、述語の指し示す動きの契機となる状況や、動きの様態を表わす状況語となることが多い。

(52) かおるは扉を押す人の気配で立ち上がった。(水 486)

(53) 「工事は出来ないとは申しません。しかし…」と若松は困惑した表情で言った。(金 347)

主語で表わされたものの主観を表わす、連体部と文末名詞の形は、述語の指し示す動きの主観の動機や、動きに伴う気持などを表わす状況語となる。

(54) まあ、どういう了見で、そんな馬鹿な事をしたのだ。(そ 278)

(55) 私は電力建設会社のやることはすべて公正でなくてはならないという考えから、役員会を招集いたしまして、業者の選定ならびに入札の方法、それから秘密保持ということにはいろいろ心を配っております。(金 331)

さらに、主語で表わされたものや状況の時間的または空間的な位置関係を述べる、連体部と文末名詞の形は、述語の指し示す出来事の時や場所を表わす状況語となる。

(56) 仕方がないからせつせと書いて、もうすこしで終りといふところでポタリと墨が落ちたりすると、泣きだしたくなつた。(低 13)

(57) 食事ノ最中ニ電話ガカカッテキタ

文末名詞になり得る形の以上のような機能も、モノを指し示すものではないという名詞の語彙的な意味に起因する。補語として働く場合は名詞の表わすものがモノとして差し出されたが、属性を示す規定語や状況語として働く場合は様態なり感情なりの語彙の意味がそのまま文法的意味なのであり、それは文末名詞として働く場合に通底するものである。

5. 文末名詞文の意味構造

前節で述べたように文末名詞とその連体部の結び付いた形は文中では補語であるよりも規定語や状況語であることが多い。ただ、実質的な意味で補語になることは少ないが、形式的にはしばしば次のようにガ格やヲ格の形をとって現われる。

(8) 「文末名詞」について

(58)しかしね、特別作業班が持ち帰った予定額の書類は、ただちに金庫に入れられたのではなくて、総裁が二、三日持ち歩いていたという噂がある。(金338)

(59)私はこの問題を徹底的に追及する決心をしております。(金357)

(60)何でもその時は、大へんおとなしい、無口な人という印象を受けた。(人384)

(58)の「噂」は動詞「ある」の主格補語、(59)(60)の「決心」「印象」はそれぞれ「する」「受ける」の目的格補語である。しかしこれらの動詞は実質的な意味を持たないために、下のようにコピュラと置き換えても文の知的意味に増減をもたらさない。

(58)→シカシネ、特別作業班ガ持ち帰ッタ予定額ノ書類ハ、タダチニ金庫ニ入レラレタノデハナクテ、総裁ガ二、三日持ち歩イテイタツイウ噂ダ

(59)→私ハコノ問題ヲ徹底的ニ追及スル決心デス

(60)→何デモソノ時ハ、大ヘンオトナシイ、無口ナ人トイウ印象ダッタ

すなわち(58)～(60)は「噂がある」「決心をする」「印象を受ける」が全体で述語として働いているとみることが出来る。村木新次郎1980はこのように「実質の意味を名詞にあずけて、みずからは文法的な機能をはたしている動詞」を「機能動詞」と名付け、「機能動詞をふくむ、ひとまとまりの連語」を「機能動詞結合あるいは機能動詞表現」と呼んでいる。この用語に従えば、文末名詞はそのほとんどが機能動詞と結び付いて名詞が連体修飾された形の機能動詞結合を形成する。

～様子をする	—	～様子だ	～思いがする	—	～思いだ
～印象を与える	—	～印象だ	～立場をとる	—	～立場だ
～感じがする	—	～感じだ	～気がある	—	～気だ
～意向を持つ	—	～意向だ	～態度に出る	—	～態度だ
～気配がうかがえる	—	～気配だ	～関係にある	—	～関係だ

など、機能動詞結合と文末名詞の対応は枚挙にいとまがない。文末名詞のうち機能動詞との結び付きが考えにくいのは「模様」「具合」「次第」「塩梅」「始末」「調子」などの数例である。「文末名詞+だ」というのは名詞の連体部を必須とする機能動詞結合の、実質の意味を持たない動詞がコピュラに収斂されてしまった形とも言えそうである。ただし下のように、機能動詞結合を形成する被修飾名詞がすべて文末名詞化するわけではない。

～自信がある	—	*～自信だ	～期待をする	—	*～期待だ
～心配がある	—	*～心配だ	～意志がある	—	*～意志だ
～恐れがある	—	*～恐れだ	～ふしがある	—	*～ふしだ

しかしこれらも文末名詞化する可能性を秘めているのではないであろうか。下の下線部などは文末名詞としてまだそれほど一般的とは言えないであろう。

(61)星野長官の方は急速に事を運ばなくてはならない事情であったが、…(金121)

(62)僕ももう三十だから、貴方の云う通り、大抵な所で、御勤め次第になって好いのですが、少し考えがあるから、この縁談もまあ已めにしたい希望です。(そ213)

次のような文末名詞もそのうち現われてくるかもしれない。

(63)*私ハ優勝スル自信ダ

(64) *私ハ彼ニ一度会ツク記憶ダ

しかし機能動詞結合と文末名詞との交替は、単に機能動詞とコンピュータとの置き換えの問題ではない。機能動詞結合を述語とする文は動詞文、文末名詞文は名詞文であって、両者は当然構造を異にする。それは、機能動詞結合の名詞部分は機能動詞の格支配下にあるが、文末名詞の場合、自身は述語でその意味上の所属先が主語という意味統語構造になっているからである。たとえば次の文末名詞文 b. は a. において機能動詞「ある」が形成していた「～に～がある」という存在構文あるいは所有構文ではなくなっている。

(65) a. あの二つには、一種キツチな趣があるよね。(低 254)

b. アノニツハ、一種キツチナ趣ダヨネ

(66) a. 彼には若い修行僧か宗教家のような感じがあった。(ワ 39)

b. 彼ハ若い修行僧カ宗教家ノヨウナ感じダツタ

次の a. で機能動詞結合の名詞を限定する所有格は、b. では文末名詞の主語としてあらわれている。

(67) a. 御馳走ぐらいに縛られては損だという彼の計算もあるかも知れないのだ。(金 307)

b. 彼ハ御馳走グライニ縛ラレテハ損ダトイウ計算カモ知レナイノダ

(68) a. 責任逃レヲシヨウトイウ彼ノ態度ガ感ジラレタ

b. 彼ハ責任逃レヲシヨウトイウ態度ダツタ

また、文末名詞が主語で表わされた主体の意思を表わす場合、連体部は

(69) 財部ハタダ、押し切ル決意ダ/財部ハタダ、押し切ロウトイウ決意ダ

(70) 青山組ハ彼ノ骨ヲ拾ウ決意ダ/青山組ハ彼ノ骨ヲ拾ッテヤロウトイウ決意ダ

のように、意志動詞の基本形あるいは「意向形+という」と形が決まっているのに対し、機能動詞結合の連体部は下のようにより自由な形を取り得る。

(71) (財部は…) ただ、押し切ろうとする決意がある～(金 80)

(72) 青山組が彼の骨を拾ってくれるだけの決意をもっている～(金 79)

主体の意思を表わす文末名詞文はまた、主節の主語と連体節の主語が常に同一であるという特徴があり、両者が異なるものは文末名詞文にならない。

(73) 彼ニハ、会社ハマチガイナク倒産スルトイウ覚悟ガアツタ

* 彼ハ会社ハマチガイナク倒産スルトイウ覚悟ダツタ

このほか、「～気がする」は下の a. のように主語で表わされた主体の感情や判断を表わすもの、「～気だ」は b. のように意思を表わすものであって、互換できないなどの個別的な現象もある。^{注4}

(74) a. 私は悲しい気が致します。(出 59)

私は、それは同一人だったような気がしますね。(点 82)

b. 呉さんははじめから死ぬ気だった。(忘 168)

あの子、絶対に言う気よ。(向 34)

文末名詞は動詞句の動詞性が捨象されてコンピュータ化したとみなされ得るが、形態上の相異がそれぞれの独自性をもたらしていることがわかる。

(10) “文末名詞”について

6. 文末名詞の述語名詞としての性格

名詞は述語に対する補語となるほかに、コンピュータを伴って述語としてもはたらく。述語としての文法的機能を担うのはコンピュータの部分である。ところで文末名詞のあるものは典型的な述語名詞に比べ、次のような二・三の点で特徴的である。

(A)否定形

一般に「述語名詞+コンピュータ」の否定形は「～では(じゃ)ない/ありません」である。文末名詞文も述語が主語で表わされたものの種別や属性、あるいは時間的空間的位置関係を表わすものは次のように同様の否定形を持つ。

(75)彼ハ学者ノタイプデハナイ

(76)まだ高校生の子供がいるから、定年退職したからって、遊んで暮らせる結構な身分じゃないんだ。(コキ 785)

(77)君ノ話トハ違ッテ、彼ハ勉強ノ最中デハナカッタヨ

しかしその他の文末名詞の中にはそれとは異なった形の否定形で現われるものや否定形そのものを持たないものがある。たとえば「覚悟」「気」「つもり」「予定」「料簡」「道理」「話」「噂」「気配」「気色」などの文末名詞は「～ではない」という否定形で現われることは少なく、もっぱら次のように「～はない」という形になる。

(78)私はお前を裁く気はない。(出 180)

(79)ええ、別に嘘を吐く料簡もありませんな。(そ 11)

(80)現地説明が終らなくては土建業者たちの入札が出来る道理はない。(金 127)

「気持」「心持」「様子」「感じ」などのように、「～はない」「～ではない」の両方用いられるものもある。

(81)三千代は自分の荒涼な胸の中を代助に訴える様子もなかった。(そ 190)

三千代ハ自分ノ荒涼ナ胸ノ中ヲ代助ニ訴エル様子デモナカッタ

(82)頭部を見ている限り、死体を掘り出したといった感じはなかった。(氷 340)

頭部ヲ見テイル限り、死体ヲ掘り出シタトイッテ感ジデハナカッタ

「わけ」の場合、「わけではない」という形であれば確定表現であり、「わけはない」であれば判断表現であるというように、否定の形によって用法の違いがみられる。

(83)彼ガ来ルワケデハナイ

彼ガ来ルワケデハナイ

「～はない」に対する肯定形は「～がある」であり、これはすなわち機能動詞結合である。「覚悟」「気」などの文末名詞が否定形の欠落を機能動詞結合の形で補うということは文末名詞と機能動詞結合との密接な関係を示すものであろう。「～はない」に限らず、次のようにさまざまな機能動詞結合の否定形が見られることは言うまでもない。

(84)彼はすぐさま、「川風さむみ千鳥鳴くなり」と言ひ添へ、別に得意さうな顔もしなかつた。(低 188)

(85)「成程ただ筆が達者なだけじゃ仕様があるまいよ」と代助は別に感服した様子を見せ

なかった。(そ 197)

(86)ふたりの向後取るべき方針に就いて云えば、当分は一步も現在状態より踏み出さ見
は持たなかった。(そ 238)

(87)人目に立つからな。私は行くわけに行かんのだ。(金 6)

「有様」「次第」「具合」「模様」「塩梅」などの文末名詞は否定形が考えにくい。

(88)今回ノコトデ困ッテイル次第デス→？今回ノコトデ困ッテイル次第デハアリマセン

(89)彼ハ彼女ヲ恐レテイル有様ダ→？彼ハ彼女ヲ恐レテイル有様デハナイ

(90)彼ガソソノカシテイタ塩梅ダ→？彼ガソソノカシテイタ塩梅デハナイ

「有様」「具合」「塩梅」「次第」は連体部の表わす事態の上位概念を示す語で、文脈中に示されたことさらに関連して実情を説明するというムードを持ち、「模様」は「ようだ」に近い推量の表現となっている。「有様」「塩梅」は望ましくない事態や意外な事実を提示するという一定のニュアンスも帯びてきているように思われる。否定形を持たないということはこれらが文法的にもモーダルなものになりかかっていることを示すのではないであろうか。

次のように疑問形にすると不自然なものこのことに関連しているであろう。

(88)→？今回ノコトデ困ッテイル次第デスカ

(89)→？彼ハ彼女ヲ恐レテイル有様デスカ

(90)→？彼ガソソノカシテイタ塩梅デスカ

一方次のように否定形でしか用いられないものもあり、それらは連体部の述語の形を含め、固定化した文末表現になっている。

(91)しかし現職をしりぞかれた後の入札ならば、総裁が義理をお考えになる筋あいはござ
いません。(金 172)

(92)私のでる幕じありませんよ。(裸 216)

(93)フンドシと王冠とどちらが生活的かなんて、わりきれたもんじゃないよ。(裸 236)

(94)けんかしてる場合じゃないでしょ。(向 115)

(B)人称制限

感情形容詞だけでなく、主観を表わす表現の広い範囲に亘って人称制限がみられることについては別稿^{注6}で述べた。文末名詞の場合も例外ではなく、小説の地の文のように視点の自由な文を除いて、感覚、感情を表わすすべての文末名詞、及び意思、認識を表わす一部の文末名詞に人称制限が見られる。感覚、感情の場合言い切りの文末名詞に対応する主語は常に、平叙文であれば1人称、疑問文であれば2人称である。

(95) *彼ハ泣キタイ思イダ

(96) *彼ハ夢ヲ見テイル気分ダ^{注7}

認識をあらわすものでは「印象」が主体を一人称に制限する。

(97) *彼ハ、皆イイ人ダツトイウ印象ダ

意思を表わす場合は逆に「気」「意向」「料簡」「魂胆」などは現代でもっばら3人称の主体に用いられるようだ。

(12) “文末名詞”について

(98) ?私ハ雨デモ行ク気デス

(99) ?私ハ来月渡米スル意向デス^{注8}

このうち「気」「魂胆」「料簡」は、

(100) 「何だ！君は何もかもめちやくちやにする気なのか」(氷 101)

(101) 「そうか。鬼のいない間に洗濯ジャブジャブでよ、ばあちゃんの部屋大掃除って魂胆か」(寺 187)

(102) この重大な問題については、いったいどうしてくれる料簡であるか。(集 41)
のように、非難や驚きの気持で他者の意思を述べるのに用いられることが多い。

(C) ‘ガノ可変’性

名詞はその修飾語句中の格助詞「が」を「の」と交替できるという特徴を持つが、次のように文末名詞の場合‘ガノ可変’のあやしくなることが多い。

(103) 彼ハ自分ガ立候補スル意向ダ → ? 彼ハ自分ノ立候補スル意向ダ

(104) 彼ニハファンガ大勢イル模様ダ → ? 彼ニハファンノ大勢イル模様ダ

(105) ソコデ私ガ呼バレタ次第デス → ? ソコデ私ノ呼バレタ次第デス

以上否定形、人称制限、ガノ可変性という面から文末名詞の特徴をみた。否定形が典型的な名詞のそれと様相を異にし、言い切りの述語になったときに人称制限が見られ、またガノ可変性も不安定であるということは文末名詞の名詞としての形態的統語的な特異性を示している。

7. ま と め

名詞は事物をモノとして差し出し、主語や目的語になることを本来の任務とする自立語である。しかし文末名詞はモノとしてではなく語彙の意味のままに述定に用いられており、しかも連体部を必須とする非自立語であって、いわば非名詞的な用法と言える。それは述定の意味的なわくぐみを示し、また時に命題に対する話者の態度を暗示するものであった。一般に述語は主語で表わされたものの一定の時・所における動き、変化、状態や、時・所に関わらない性質、種類、同一物などを表わす。典型的には動きや変化を表わす述語は動詞であり、状態や性質を表わす述語は形容詞、種類や同一物を表わす述語は名詞である。動詞、形容詞、名詞がそれぞれの典型的な用法からずれてくると、こうした文の意味と述語の品詞との対応はくずれてくる。文末名詞になり得る名詞はその一例であって、語彙的にはモノを表わすものではなく、それに関連して機能的には補語になるほかに状況語や規定語などになることが多く、また述語としては否定形、人称性、ガノ可変性に特徴が見られた。いわゆる助動詞は形態的には非自立語で活用を有するものであり、意味・用法的には用言や体言などに下接してその意味を補ったり話し手の種々の判断を表わすものとされる。形式名詞の「ノ」「ハズ」などが文末にきて助動詞的な機能を持つことはよく知られているが、文末名詞はこれらよりは実質的な意味を有しながら、文末に位置して相似た働きを持つ。いわば名詞と助動詞の両域にまたがる、あるいはその境界域にある語群と考えることができるのではないだろうか。

しかし文末名詞文はあくまで名詞文ではある。ちなみに文末名詞文を英訳と対照してみると、

(106)彼は頑固な性質だ。He is stubborn by the nature.

(107)それが気に入った様子だ。He seems pleased with it.

(108)泣きたいような気持です。I feel like crying.

(109)私は昼前に帰るつもりです。I expect to come back before noon. (以上(N)より)のようになり、日本語の文末名詞文は英語では動詞文や形容詞文になっていることが多い。よく西欧語と日本語を比較して、西欧語は名詞中心の言語であり、日本語は動詞中心の言語であると言われる。しかし上の諸例を見る限り日本語はむしろ名詞中心の言語のように思えてくる。日本語でこうした形の名詞文がかなりの頻度で用いられているというのは何を意味するのであろうか。世界の諸言語の中に日本語の文末名詞文の類を持つ言語がどのくらいあるのか分からないが、文化的にも一考にあたいすることかもしれない。

注1) 引用作品名略号及び頁。引用資料参照。

注2) 「感じ」という語は主観を表わすと同時に感覚対象のもつ客観的な側面をも意味する。

「感じ」を文末名詞とする文は、対象が感覚主にとって外在的なものの場合、「感じ」の語義の広さのために、主体の感覚、感情、属性、様態を表わす文、あるいは後述する認識を表わす文のいずれとも決め難い場合が多い。例を挙げる。

・マウンドまで18.44メートルと聞いていますが、ずいぶん遠い感じですね。(ア1988・8・8夕)

・まだ一人前の女になり切っていないような細い肢体も、兄譲りの、どちらかといえば色の黒い精悍な顔だちも、かおるという男性にも女性にも両方に通用しそうな名前にぴったりと合っている感じだった。(氷170)

・床の敷物も巴絵のハイヒールまでがスッポリ埋まってしまうような感じだった。(おバ46)

注3) 文末名詞文は形式的に大きく、「連体部+文末名詞+コピュラ」で構成された述部に対応する主語をもつものと、文の形をしたものに「文末名詞+コピュラ」が下接した形のものに分けることができる。前者の場合、文末名詞が時間的または空間的な位置関係を述べるものには述語の意味上の所属先が主語という関係は成り立たないが、整合性を保つためには、

・彼ラハ移動ヲ始メタ直後トイウ (時間的)状況ダツタ

のように新たに文末名詞を仮定できないこともない。後者の場合、文末名詞の所属先である論理上の主語は文脈中に求められる。

注4) 「(アンナ所ニ)行ク気ガスル？」の下線部は「行ク気ダ」に近いが、こうした「気ガスル」は用法が限定される。

注5) 下のように、これらに「～ではない」という否定形が全く見られないわけではないが、「～はない」の方が圧倒的に多く、また自然に感じられるように思う。

・「世間の夫婦はそれで済んで行くものかな」と独言の様に云ったが、別に梅子の返事を予期する気でもなかったので、代助は向の顔も見ず、ただ畳の上に置いてある新聞に眼を落した。(そ211)

・彼としては、嘘を言っているつもりではなかった。(レ72)

・代助はあながち父を馬鹿にする了見ではなかった。(そ207)

注6) 新屋映子 1989

(14) “文末名詞”について

注7) ただし、言い切りでなければ「彼ハ泣キタイ思イナノダ」「彼ハ夢ヲ見テイル気分ダロウ」のように人称制限は解除される。

注8) ・私は悦んで遇う気です。(出100)

・しかし私は真面目に生きる気です。(出66)

のように1人称主体の例は現代では少なくなっている。

引用資料 (()内は著者・書名・発行所)

裸(開高健・裸の王様, 昭和文学全集9・角川書店) そ(夏目漱石・それから・新潮文庫) コキ(林史典他・国語基本用例辞典・教育社) 氷(井上靖・氷壁・新潮文庫) おバ(遠藤周作・おバカさん・中公文庫) 金(石川達三・金環蝕・新潮文庫) 恐々(吉行淳之介・恐怖恐怖対談・新潮文庫) 低(丸谷才一・低空飛行・新潮文庫) 向(向田邦子・向田邦子 TV 作品集・大和書房) 人(芥川龍之介・人物記, 芥川龍之介集・筑摩書房) ワ(伊藤整・若い詩人の肖像・新潮文庫) 出(倉田百三・出家とその弟子・新潮文庫) 点(松本清張・点と線・新潮文庫) 忘(福永武彦・忘却の河・新潮文庫) 寺(向田邦子・寺内貫太郎一家・新潮文庫) 集(井伏鱒二・集金旅行・新潮文庫) レ(佐藤信夫・レトリック感覚・講談社) N(NEW JAPANESE-ENGLISH DICTIONARY・研究社) ア(朝日新聞)

参考文献

高橋太郎 1979「連体動詞句と名詞のかかわりあいについての序説」言語学研究会編『言語の研究』むぎ書房

高橋太郎 1984「名詞述語文における主語と述語の意味的な関係」『日本語学3-12』明治書院

寺村秀夫 1975~1978「連体修飾のシンタクスと意味」『日本語・日本文化4~7』大阪外国語大

奥津敬一郎 1974『生成日本文法論』大修館書店

村木新次郎 1980「日本語の機能動詞表現をめぐって」『国研報告74 研究報告集2』

Kuroda, S. Y. 1973 Where Epistemology, Style, and Grammar Meet; A Case Study from Japanese. A Festschrift for Morris Halle

新屋映子 1989「日本語の主観用言における人称制限」『東京外国語大学日本語学科年報』東京外国語大学日本語学科

〔付記〕

本稿執筆にあたり、阪田雪子・高橋太郎両先生より貴重な御助言をいただきました。厚く御礼申し上げます。

——独協大学非常勤講師——

(平成元年9月13日 受理)